

自分と異なる考えや価値観を持つ他者への寛容性測定尺度の作成

井出啓子

本研究はこれまで研究ごとに統一されていなかった、自分と異なる考えや価値観を持つ他者への寛容性という構成概念について新たに定義し、その概念を網羅的に測定する尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することを目的とした。予備調査で抽出された34項目について、本調査で186名の大学生から有効回答が得られた。探索的因子分析の結果、寛容性は「自身と異なる考えに対する積極性」「他人による意見の同調や強要への批判」「自身と異なる考えへの無批判な同調」「自身と異なる考えに対する関心の低さ」「自身と異なる考えに対する抵抗感」の5因子（計23項目）から構成されることが示された。 α 係数を検討した結果、一定の内的整合性（信頼性）が得られた。また、受容状況の寛容反応、社会的受容性、探求心、調和性、開放性、ギャング・チャム、ピア、あいまいさへの耐性といった尺度との相関が確認され、妥当性が示された。

黒人に対する日本人の偏見 —古典的・現代的レイシズムに着目して— 足立直慈

本研究では、日本人が人種としての黒人に対して抱く偏見について明らかにすることを目的として行われた。KJ法によるイメージのカテゴリ化課題では、Positiveな記述が多く見られた一方で、脅威や被差別など、Negativeな記述も同等程度に散見された。古典的・現代的レイシズムの程度に関する課題では、高低群に分けて分析を行ったところ、社会的役割に関する認知では、有意な差を発見することができなかったが、レイシズムを抑制するとされる「人道主義—平等主義」の価値観において有意な差を発見した。特に、先行研究からは予想されなかった現代的レイシズムと高レイシズム群間で差が見られたことは新しい知見であり、日本人特有の現代的レイシズム観があることを示唆する結果となった。

新型コロナウイルス流行下における大学生のストレスと対処行動 —曖昧さへの態度に着目して—

岩田萌花

本研究では、新型コロナウイルス感染症流行下において、曖昧さへの態度の違いにより、心理的ストレス過程に差異が見られるのかを検討した。また、この状況下において、大学生が具体的に何に対してストレスを感じているのか調査を行った。大学生194名を対象に、曖昧さへの態度尺度、認知的評価尺度、コーピング尺度、ストレス反応尺度を測定した。パス解析の結果、この状況下において、曖昧さの享受が高い人はコントロール可能性を媒介して、積極的対処を行うこと、不安が高い人は認知的評価を媒介して積極的対処を行うこと、受容が高い人は認知評価を媒介せず消極的対処を行うこと、統制が高い人は認知的評価を媒介せず積極的対処を行うこと、排除が高い人はコントロール可能性を介して積極的対処を行うことが示された。曖昧さへの態度によって、この状況下における認知的評価とコーピング及びストレス反応の過程が異なることが明らかになった。

外国人留学生を対象とした大学入試分析 —日本留学試験（EJU）の得点に基づいた検討—

呉 欽 鵬

本研究は外国人留学生を対象とした大学入試特別選考において、選考の手続きや方法を明言していない現状、およびこの現状に伴う入試選考の不透明さを一つの深刻な問題として提起し、入試選考の一環であるEJU得点と大学の合否関係について検討した。各留学生のEJU得点を説明変数、大学入試選考の合否結果を目的変数に設定し、ロジスティック回帰モデルを構築した。また、構築されたモデルに対し、McFaddenの擬似説明率を用いてモデルの適合度を評価した。ロジスティック回帰係数およびMcFaddenの擬似説明率の類似度から、階層的クラスター分析の手法を用いて、大学をいくつかの近い傾向を持つグループに分類した。本研究の結果により、これから外国人留学生がEJU得点を使用して自分の学力を評価する際、あるいは志望大学を選択する際、より客観的な評価指標を提供できることが期待される。

低地位集団成員のネガティブな社会的アイデンティティへの対処方略 —移動可能性と比較次元に注目して—

高 橋 ひかり

本研究の目的は、地位格差のある集団間状況において、低地位の集団に所属する人が自身のネガティブな社会的アイデンティティにどのように対処するのかを明らかにすることである。内集団バイアスの生起に注目し、移動可能性と集団内地位の条件ごとに検討を行った。実験では最小条件集団を形成し、集団からの移動可能性と集団内地位に操作を加え、異なる2つの課題に関して内集団と外集団の成員に対する予測評価を測定した。その結果、全ての条件において内集団より外集団への予測評価点が高く、外集団ひいきがみられた。また、移動可能性が有る場合、集団形成に用いたのと同次元の課題の評価において、集団内の高地位者より低地位の方が外集団ひいきの程度が大きかった。したがって、内集団バイアスに集団的自尊心が影響した可能性や、社会的アイデンティティの補填として個人的アイデンティティを戦略的に顕現化させ、自己高揚を図った可能性が示唆された。

自尊感情の随伴性と心理的well-beingの関連に関する一検討

松 隈 快

本研究の目的は、自尊感情の随伴性に関して、自尊感情の内的な随伴子の方が外的な随伴子よりも心理的健康に大きな正の影響を与えていることを明らかにすることであった。自尊感情の随伴子とは、自尊感情は必ず何らかの事象に随伴していると考えられる立場において、その随伴の原因となる事象のことである。内的な随伴子の方が外的な随伴子より安定的だと考えられ、心理的健康において重要な意味を持つ。そこで、外的な随伴子として優越感と他者評価、内的な随伴子として独自性と将来の目標を設定して測定し、この4種類の随伴子と心理的well-beingとの関連を検討した。大学生に質問紙調査を実施し、158名から有効回答を得た。その結果、心理的well-beingに対して他者評価が最も大きな正の効果を与えていること、独自性も一定程度、正の効果を与えていることが明らかとなった。したがって、内的な随伴子の方が外的な随伴子よりも大きな正の影響を与えていることは示されなかった。

キャリア・パースペクティブの形成と現実自己・理想自己の関連の検討 —ソーシャルサポートの調整効果に着目して—

松本 有希保

本研究では、職業的な将来の見通しであるキャリア・パースペクティブに注目し、現実自己と理想自己とのズレの大きさによってその形成の程度が異なるという仮説の検証と、ソーシャルサポートによる調整効果の確認を目的とした。相関分析の結果、理想自己と現実自己のズレと理想自己の水準が有意な正の相関を示し、自己一致をしている者は、高い水準ではなく、低い水準での自己一致であったことが確認できた。また、階層的重回帰分析の結果、キャリア・パースペクティブの下位尺度のうち、見通しの明確性と見通しの連続性について、親からの情緒的サポートと友人からの情緒的サポートの調整効果が確認できた。キャリア・パースペクティブと理想自己と現実自己のズレ、理想自己の水準の主効果は見られず、理想自己を高く持つこと、あるいは、理想自己と現実自己との不一致が、キャリアを見通すことには直接つながっていないことが明らかになった。

場面の条件によるリーダーのプロトタイプ性の適切性がリーダー評価に与える影響 —人格評価、能力評価、および協力行動に注目して—

水野 ひびき

集団プロトタイプ性とは、内集団成員がその内集団全体を体現している程度を意味し、集団志向的行動はプロトタイプ的行動と見なされる。本研究では、一般的な集団意思決定場面と緊急の集団意思決定場面とにおいてプロトタイプ性の適切性が異なり、リーダー評価や協力行動に与える影響を明らかにすることを目的として、場面想定法を用いて測定した。分散分析の結果、一般的な場面では高プロトタイプリーダーが低い場合より適切であり人格評価が高く、緊急場面では低プロトタイプリーダーが適切性の高低に関わらず能力評価が高かった。協力行動に関しては、緊急場面の高プロトタイプリーダーのとき、他のリーダーと比較して平均値が高い結果となった。場面に関わらず、高プロトタイプリーダーは人格評価が高く、長期間の集団や関係性の維持には高プロトタイプリーダーが適切である一方で、緊急場面ではプロトタイプ性が必要とされないこともあることが示唆された。

望ましい困難さを用いたオンライン調査における努力の最小限化の防止 —非流暢フォントを用いた検討—

吉野 文菜

オンライン調査全体に読みにくいフォントを用いることによって、努力の最小限化すなわち回答者が質問文を読まない行為を防止できるかを検討した。記憶・学習に関して非流暢性効果が生じることを踏まえ、オンライン調査でも質問文にあえて読みにくいフォントを用いることによって、回答者の注意を引き出し、努力の最小限化を防止できるという仮説を立てた。2つの実験で、読みにくいフォントが使用された非流暢フォント条件と読みやすいフォントが使用された流暢フォント条件におけるIMC違反率とDQS違反率および再認課題正答率を比較した。しかし、仮説を支持する結果は得られなかった。この結果から、非流暢フォントが人の注意を引き出すためには意図的学習の文脈で用いる必要があると示唆された。本研究では、IMCを実際のオンライン調査に即した自然な形に直すことの意義や、研究方法を変更した場合に非流暢フォントが努力の最小限化を防止する可能性も議論した。

大学生における友人関係の切替と統合的葛藤解決スキルおよび本来感との関連

杉 浦 萌 野

青年期の友人関係に関する研究は、これまでに希薄化論や選択化論など様々な検討がなされてきた。本研究においては、友人関係研究における新たな観点である「状況に応じた切替」に着目し、それが統合的葛藤解決スキルおよび本来感とどのように関連しているかについて検討するため、質問紙調査を行った。そして、相手や状況によって自分を切り替える自己切替と、葛藤が生じた際に自他双方の希望を叶えられるよう調整する統合的葛藤解決スキル尺度の得点を投入したクラスタ分析を行った。結果として、自己切替得点が高くても、統合的葛藤解決スキルが高い群においては、他群と比較して本来感が高くなっていることが示された。いくつかの先行研究では、自己切替に関する不適応的な面が示されていたが、自己切替を行っていても葛藤場面において対処できるスキルが伴っていれば、自分らしくいる感覚である本来感を維持できることが示唆された。

性役割期待がジェンダー観に及ぼす影響

—行為遂行性に着目して—

野 場 彩 乃

本研究では、バトラーのジェンダー行為遂行性理論をもとに性役割期待がジェンダー観に及ぼす影響は行為遂行性によって変化するののかについて検討することを目的とした。性役割に関する M-H-F scale の男性性、女性性、人間の3特性を用いて大学生137名（男性51名、女性85名、その他1名）を対象に質問紙調査を行った。重回帰分析と相関係数の差の検定の結果、(1)男女ともに自分の性別と一致する性役割期待は男性への Masculinity 要求と女性への Femininity 要求に促進的な影響を与えること (2) Masculinity の性役割期待は男女問わず Masculinity の要求に促進的な影響を与えること (3) Femininity の性役割期待は男性への Femininity 要求に促進的な影響を与えることが示された。また、性役割期待とジェンダー観の相関において行為遂行性の影響はみられなかった。

大学生の部活動・サークルにおけるリーダーシップが部活動・サークルへの適応感に及ぼす影響

—活動外のリーダーのコミュニケーションに着目して—

橋 本 雄 生

本研究は、部活動・サークルにおけるリーダーシップ、活動外のリーダーのコミュニケーション・スキルとメンバーの部活動・サークルへの適応感の関連を検討することを目的として行われた。分散分析の結果、部活動・サークルへの適応感に対してリーダーシップと活動外のコミュニケーション・スキルの交互作用が認められた。また、リーダーシップ低群において、コミュニケーションの高低の有意差があることが示された。本研究の結果から、リーダーの活動外のコミュニケーション・スキルが高いと、リーダーシップの高低に関わらず、部活動・サークルへの適応感が高くなるということが明らかになった。本研究における知見から、チームをまとめたり、注意を促したりする活動内でのリーダーシップ行動が弱くとも、活動外でフォロワーとの良好なコミュニケーションを築くことでリーダーへの満足度が高められるということが示唆された。

青年期の親子関係と飲酒行動に関する研究

—自己制御に着目して—

飯 田 陽 奈

本研究は、青年期の親子関係が飲酒行動に及ぼす影響と、親子関係と自己制御の交互作用を検討した。自己制御の種類にも着目し、気質的側面の自己制御としてBAS/BIS尺度のBASを、社会的側面の自己制御として社会的自己制御尺度の自己抑制を使用した。分析の結果、モニタリングが低いほどアルコール依存症傾向得点が高いことが明らかになった。モニタリングとは、子どもの居場所、活動や適応を追跡し注意を払うことを含む一連の養育行動である。また、自己抑制能力が低く、モニタリングされているという意識が高い者は、モニタリングされているという意識が低い者よりもアルコール依存症傾向得点が低いことが明らかになった。本研究の結果から、親が子どもの行動に注意を払い、把握する関係性にあることが、大学生の過度な飲酒行動を抑制する可能性が示唆された。また、社会的な面で自分の欲求を抑制する能力が低い者において、その傾向が顕著であることが示唆された。

喪失体験における反すうと関係性の変化についての検討

—感情に着目して—

佐 藤 星

本研究は、喪失体験における反すうと関係性の変化について、感情に着目し検討することを目的とした。回答が得られた140名のうち、対象者83名に対し、分析を実施したところ、当時の侵入的思考は現在の侵入的思考よりも高いことが示された ($t(82) = 12.77, p < .001$)。また、喪失前対象に抱いていた肯定的感情は、喪失後に低下することも示された ($t(82) = 10.13, p < .001$)。なお、反すうと関係性の変化について着目すると、喪失前対象に抱く安静状態の高さは喪失時の意図的熟考の高さに関連することが明らかとなった。一方で、喪失対象に抱く感情には肯定的感情と否定的感情を含んだ複合的感情である可能性も示唆された。以上の結果から、縦断的研究を用いて2時点の反すうを調査すること、また質的研究を実施し複合的感情の明確化をした後、再度これらの関係を検討することが望ましいと考えた。

部下によるリーダー認知と上司からの声掛けが部下のワークモチベーションに与える影響

柳 本 有 紀

本研究の目的は、部下が抱く上司のリーダー認知（「良いリーダー」認知度と理想のリーダー像との一致度）と上司からの声掛けの内容が、部下のワークモチベーションにどのような影響を及ぼすのかを検討することであった。予備調査では、ワークモチベーションに影響を与える声掛けについて尋ね、モチベーションを向上、低下させる声掛けを見出した。本調査では、サーバント・リーダーの特性を持つ上司を設定し、部下によるリーダー認知と声掛けの内容がワークモチベーションに与える影響を検討した。その結果、3要因全てが部下のワークモチベーションに影響を与えることが示唆されたが、その中でも声掛けの内容による影響が最も大きかった。また、サーバント・リーダーの特性を有する上司が求められていることが示され、企業や組織におけるサーバント・リーダーの重要性も示唆された。最後に、今後の研究課題について論じた。

仕事と育児の両立の個人差を生む要因についての検討 —親のストレスコーピングに着目して—

石川 ひなの

本研究の目的は、仕事と育児の両立の個人差を生む要因について、親のストレスコーピングに着目して検討することであった。また新型コロナウイルス感染症の拡大がもたらした環境面の変化が両立に及ぼす影響についても検討した。園児の保護者を対象にウェブ上でアンケート調査を行った。一部の尺度得点において性差が見られたため、最終的に女性178名を分析対象者とした。分析の結果、感染症拡大前・後ともに、ストレスコーピングの積極的コーピング、肯定的再解釈、受容を使う回数が多いほど就業者役割達成感と親役割達成感が高かった。よってこれら3つのコーピングは両立を促進する要因であることが示唆された。またストレスコーピングの柔軟性がある者は感染症拡大前・後ともに就業者役割達成感が高かった。さらに就業者役割達成感は感染症拡大前の方が拡大後よりも高かった。感染症の拡大が仕事における役割達成感に負の影響を及ぼしたことが示唆された。

大学生における両親間葛藤と抑うつの関連 —抑うつの抑制要因に焦点づけて—

河合 祐依

本研究の目的は、大学生において、きょうだいからのソーシャルサポートと、より身近な親の受容的な態度が、両親間葛藤が子どもの抑うつに与える影響を調整し、抑うつを抑制させる要因になり得るかを検討することであった。両親と同居していきょうだいがいる大学生149名を対象に調査を実施した。階層的重回帰分析の結果、葛藤の持続性ときょうだいからのソーシャルサポートの交互作用が有意であり、葛藤の持続性が高い場合には、きょうだいからのソーシャルサポートを多く受けることで、抑うつは抑制されることが示された。親の受容的な態度の主効果が有意であり、抑うつを抑制させることが示されたが、両親間葛藤との交互作用は有意ではなかった。以上の結果から、きょうだいからのソーシャルサポートが、両親間葛藤と抑うつの関連を部分的に調整する可能性が示唆された。

怒り経験の受け止め方が誘発されて表出する攻撃の置き換え (TDA) に与える影響

桑原 美月

攻撃には挑発の源泉に対する報復としての直接的攻撃の他に、挑発の源泉とは異なる他の対象に表出する置き換えられた攻撃がある。特に些細な誘発事象をきっかけとして表出する置き換えられた攻撃をTDAと呼ぶ。挑発事象と誘発事象の間における認知活動としての怒りの反すがTDAの表出に影響を与えるとされているにも関わらず、TDAにおける認知活動の影響について検討した研究は多くはない。そこで、本研究では、淡野(2008)の仮想場面法におけるTDAパラダイムを使用し、挑発事象と誘発事象の間における認知活動としての怒りの反すが表出されるTDAの強さについて検討した。その結果、誘発事象の主効果のみが有意であり、挑発事象の主効果と交互作用は有意ではなく、TDAが表出されないことが示された。また、挑発事象が認知的に肥大化されるほど誘発事象で喚起される怒り感情が大きくなることが示された。

愛着スタイルが職業選択に与える影響

小 島 あやね

本研究の目的は、愛着スタイルが仕事形態の選択に与える影響および、好まない働き方への移りやすさを、報酬を利用して検討することである。大学生160名を対象に、愛着スタイルを構成する自己観・他者観および職業選択に関する傾向を測定し、分析を行った。結果より、自己観が働き方のこだわりおよび職業選択の際に社会的評価を重要視する程度に、他者観が魅力的に感じる働き方および職業選択の際に自己価値、社会的評価、人間関係、組織からの独立を重要視する程度に影響を与えていることがわかった。

仕事および家庭において得られるソーシャル・サポートの効果 —ワーク・ファミリー・コンフリクトとの関連と抑うつ感への影響—

鈴木 意 和

共働き世帯数増加のなか、仕事と家庭の両立のためには両者のストレスへの対処が重要であり、両立の際生じる葛藤はワーク・ファミリー・コンフリクトと呼ばれる。先行研究では職場の人間からのサポートが仕事への意欲に、夫婦間の対処行動が生活上の満足感に影響を与えることが示されている。しかし職場と家庭の枠を超えたサポートの提供に注目した研究は多くない。そこで誰からのサポートが葛藤で生じる抑うつ感を低減させるかを明らかにするために、共働きで子どもがいる人にアンケートを実施した。結果、葛藤が高くても上司から仕事に関わる道具的サポートをもらっていると家庭の抑うつ感を低めるが、それ以外の場合で緩衝効果は確認できなかった。生活の変化が抑うつ感を高めた要因であることも考えられるが、サポートがあっても抑うつ感が高かったことについては今後両者の因果関係をふまえてソーシャル・サポートの効果を複合的に検討する必要がある。

人間関係における喪失体験からの心理的回復の様相 —心理的回復に伴う心的状態に着目して—

高 木 郁 香

喪失体験からの心理的回復過程は、主に、縦断的かつ質的に、段階モデルを中心として検討されてきた。そこで本研究では、人間関係における喪失体験からの心理的回復に伴う心的状態について、横断的かつ量的に明らかにし、個人の一時点的心的状態に着目すること、また、それらの心理的健康に関する指標や個人特性との関連を検討することを目的とした。182名の調査対象者について、小此木(1997)より項目を抽出した「心理的回復過程における心的状態」の特徴から4つのクラスターを設け、それらと心理的回復状態の自己評価、喪失体験の時期、「新しいストレス反応尺度」、「人生満足度尺度」、「三次元モデルに基づく対処方略尺度」との関連について考察を行った。その結果、従来の研究で明らかにされてきたことが確認されるとともに、これまで扱われてこなかった心的状態の個人の存在と、それらが持つ様々な特徴が明らかになった。

大学生の愛着スタイルが援助要請行動に及ぼす影響

—悩みの種類と援助要請の相手に焦点を当てて—

高橋 芹 奈

本研究の目的は、大学生の愛着スタイルが援助要請行動の量や援助要請相手に及ぼす影響を明らかにすることであった。大学生190名を対象に、現在または将来のことについての悩みと、その悩みに関する援助要請行動を相手別に調査した。愛着スタイルは中尾・加藤（2004）の一般他者版成人愛着スタイル尺度を用いて測定し、自己観を表す「見捨てられ不安」と他者観を表す「親密性の回避」のそれぞれの高低により4つの型に分類した。その結果、親密性の回避が高い拒絶型と恐れ型は、親密性の回避が低い安定型ととられ型に比べて友人への援助要請行動の量が少なく、援助要請相手に関してはフォーマルな相手（学内外の相談機関）とインフォーマルな相手（家族・友人）への援助要請行動の差が小さかった。これらの結果から特に親密性の回避が大学生の援助要請行動に影響を及ぼすことが示唆され、親密性の回避が高く援助要請行動が少ない学生への支援の重要性が示された。

第二反抗期における反抗感情・反抗行動の個人差

—子どもの志向性と親子関係の関連から—

高橋 美 帆

第二反抗期には個人差があるが、何がその原因となっているのだろうか。反抗期があった理由を子どもに尋ねた研究や、親子間葛藤について調査した先行研究は見られるが、反抗期の要因について調査した研究は少ない。

そこで本研究では、反抗期に影響を及ぼす要因として個人の特性と親子関係の二つを考え、これらが反抗期にどのように関連しているのかについて検討した。個人の志向性、親子関係の理想と現実、反抗期の程度に関するアンケート調査を実施し、データを分析した。その結果、親子関係の理想と現実の差が大きいほど子どもの反抗感情や反抗行動は大きくなることが示された。一方、子どもの志向性と反抗感情・反抗行動との関連は示されなかった。このことから、反抗期の特徴を左右するのは個人の要因ではなく、親子関係であると考えられる。また、本研究では扱わなかった子どもや親の性別についても考慮した上で更に研究を深めていく必要がある。

内的作業モデルに変化を与える要因としての家族機能に関する研究

—家族機能の適応性と凝集性に注目して—

中 村 和 音

本研究は、内的作業モデルの変化に影響する家族のあり方を明らかにすることを目的として実施された。大学生を対象として質問紙調査を実施し、回想法を用いながら、児童期前期と青年期のIWMスタイル（「見捨てられ不安」と「親密性回避」）と、家族機能（適応性と凝集性）を測定した。欠損値のない111名のデータを用いて、IWMスタイルの変化の有無や変化の仕方によって群分けし、分析を行った。家族機能の適応性はIWMスタイルの変化の有無に、凝集性は変化の質に影響すること、家族機能はIWMスタイルを調整するという仮説を立てたが、いずれも支持されなかった。分析の結果からは、先行研究で示されていたように、IWMスタイルは変化が少ないことが示唆された。また、安定維持群は不安定維持群と比べて凝集性が高いことが示され、凝集性がIWMスタイルの安定性に関連することを示した。

現代青年に特有な友人関係のあり方が友人関係における演技に及ぼす影響

新井田 卓子

本研究では、「周囲の人との衝突を避け、かつてより高度で繊細な気配りを伴った関係を志向する」という現代青年に特有な友人関係のあり方が、友人関係における演技に与える影響を、性差も考慮し検討することを目的とした。大学生を対象に質問紙調査を行い、友人関係の取り方に関するクラスタ分析の結果、互いに傷つけることを回避する「群れ志向群」、自分にこもり友人関係を回避する「関係回避群」、内面的関係を取る「個別関係群」の3群が得られた。また、2要因分散分析の結果、友人関係の取り方に関する3群と性別の交互作用は見られなかったが、現代の特徴を有する「群れ志向群」は、他の2群に比べ友人関係において演技を頻繁に行っていること、女性は男性よりも調和的な演技やトラブル回避、関係の維持を目的とした演技を頻繁に行っているということが示された。

アタッチメントスタイルと自己意識的情動への態度

秦 知恵子

本研究では、青年期における母親、父親、友人、恋人に対するアタッチメントスタイルが、自己意識的情動(恥、誇り、嫉妬)への態度にどのように影響を与えるのかを検討することを目的とした。アタッチメントスタイル尺度(ECR-RS)と新規に作成した自己意識的情動への態度尺度を用いて大学生250名を対象にオンラインアンケート調査を実施した。分析の結果、アタッチメントスタイルは3つすべての自己意識的情動への態度に影響することが示された。恋人あり群と恋人なし群では、ともに母親、父親、友人に対するアタッチメントスタイルの影響が確認されたが、恋人あり群において、自己意識的情動への態度に影響を与えやすいと予測した恋人に対するアタッチメントスタイルの影響は見られなかった。また、両群において、恥の自己覚知、恥への不快感、嫉妬の自己覚知への影響が認められたが、アタッチメントスタイルの影響の仕方は異なることが示された。

課題の性質と曖昧さへの態度が先延ばしに及ぼす影響

古 阪 英 土

達成すべき事柄を遅らせる先延ばしは、これまで先延ばしをする本人の個人内要因にのみ着目され研究されてきた。しかし、先延ばしをするとき先延ばしされる課題が必ず存在することを踏まえ、本研究では課題の性質と個人内要因の交互作用が先延ばし量に及ぼす影響を検討した。良定義課題と不良定義課題を用意し、個人内要因は曖昧さへの態度を用いた。不良定義課題に取り組む際、曖昧さに対して適応的な態度とされる享受的・受容的態度を持つほど先延ばし量が減少し、不適応的な態度とされる不安・統制・排除的態度を持つほど先延ばし量が増大するという仮説を提起した。しかし結果は、良定義課題に取り組む際、曖昧さに対して排除的態度や不安的態度を持つほど先延ばし量が減少し、仮説は支持されなかった。しかし、個人内要因だけでなく、課題の性質も考慮することによって先延ばしへの影響が変化することは明らかとなった。

大学生の感覚処理感受性、性同一性が本来感に及ぼす影響

本田 碧衣

本研究は、大学生の感覚処理感受性、性同一性が本来感に及ぼす影響について質問紙調査により検討した。生得的に敏感で傷つきやすい特性の感覚処理感受性において女性が男性よりも有意に高く、主観的なこころの性と社会的にみられる性が一致している感覚の性同一性において女性が男性よりも有意に低かったが、自分らしくいられる感覚の本来感における男女差は有意でなかった。また女性において感覚処理感受性は性同一性と有意に弱い負の相関を、本来感と有意に弱い正の相関を示した。共分散構造分析の結果、感覚処理感受性の性同一性への有意な負の影響、性同一性の本来感への有意な弱い正の影響が示されたが感覚処理感受性の本来感への媒介効果の可能性が残された。最後に、女性・男性以外の「両性・どちらでもない性」の性自認をもつ人は、性同一性と本来感が男女よりも低い傾向にあった。今後は各概念の多次元因子構造を考慮した検討が求められる。

スポーツ場面におけるネガティブ・フィードバックによる動機づけの向上

—指導者に対する信頼感、教授的理由の認知との関連から—

山田 真平

本研究では、名取（2007）の仮想場面を参考に、受け手の指導者に対する信頼感、教授的理由の認知や目標志向性の違いによって、スポーツ場面においてネガティブ・フィードバックが受け手の動機づけに与える影響について検討した。成功場面・失敗場面×否定的な言語的フィードバックの2つの練習状況を描いた図版とシナリオ文を提示し、動機づけと認知的側面の測定を行った。重回帰分析の結果、成功場面では、指導者に対する信頼感や教授的理由認知が高い者は、指導者のネガティブ・フィードバックで動機づけが高まることが示された。一方、失敗場面では、信頼感と動機づけは有意な関連が見られず、成功場面と失敗場面でもネガティブ・フィードバックが持つ意味合いが異なる可能性が示唆された。動機づけを高めるために、指導者が日頃から受け手と信頼関係を築くこと、受け手が教授的理由を認知できるよう工夫し、場面に合わせた言葉かけを行うことの有効性が示唆された。

友人からの相談場面におけるストレス反応に個人特性が及ぼす影響

—共感性、自己制御に着目して—

山辺 史織

本研究は、友人から深刻な相談を受ける場面でのストレス反応を測定し、共感性、自己制御との関連を検討する。予備調査では、友人から深刻な相談を受ける場面として「友人の死」、「いじめ」、「虐待」という3つの仮想場面を選定した。本調査では、大学生124名を対象に、上記3つの仮想場面を読んでもらい、その後生じたストレス反応と、共感性と自己制御について調査を行った。重回帰分析の結果、共感性からストレス反応へは正の主効果がみられたが、自己制御からストレス反応への主効果はみられなかった。共分散構造分析の結果、自己制御の下位尺度である注意の制御から共感性の下位尺度である個人的苦痛へ正のパスが有意であり、個人的苦痛からストレス反応へのパスが有意であった。以上より、適切に注意を切り替える能力である注意の制御が、個人的苦痛を抑制し、相談場面におけるストレス反応の低下につながることが示唆された。

児童期の感情理解と心の理論の発達が友人関係と学級適応感に及ぼす影響

山本夏実

本研究では、児童期の他者理解能力（感情理解、心の理論）の発達が、児童の主観的な友人関係と学級適応感に及ぼす影響を検討した。小学校2年生から4年生182名を対象に、感情理解課題、二次の誤信念課題、友人関係尺度、学級適応感尺度を含む質問紙を用いて、集団調査を実施した。分析の結果、他者理解能力について、年齢による発達的变化と日本の児童の発達の特徴が示された。また、個別の感情理解の側面と友人関係・学級適応感の間に一部関連が示されたものの、感情理解・二次の誤信念理解と友人関係・学級適応感の間に有意な関連はほとんど認められなかった。これより、2年生から4年生の主観的な友人関係・学級適応感には、他者理解能力以外の要因が影響を及ぼす可能性が示された。また、友人関係・学級適応感を主観・客観の両側面から検討することと、他者理解能力を感情理解と心の理論の両側面から捉えることの重要性が示唆された。

職場生活における心理的居場所感とキャリア焦燥感、離転職意思との関連

鈴木亜美

本研究の目的は、職場生活における心理的居場所感が離転職意思をどの程度抑制するかどうかを検討することである。この目的の検討のために、本研究で仮定するモデルは、離転職意思を抑制する要因として、間接的と直接的な要因を含んでいる。間接的には、職場生活における心理的居場所感の「役割感」「安心感」「本来感」がキャリア焦燥感の「切迫感」と「キャリアの懸念」を介して離転職意思を抑制する。また、「役割感」「安心感」「本来感」が直接的に離転職意思を抑制する。23～30歳の結婚や育児経験がない就労者男女173名を対象にし、共分散構造分析を行った。その結果、(1)「安心感」と「本来感」が「切迫感」や「キャリアの懸念」を介して離転職意思を抑制すること、(2)「安心感」が直接的に離転職意思を抑制すること、(3)「役割感」が直接的に離転職意思を促進すること、(4)「切迫感」のみではなく「キャリアの懸念」も離転職意思を促進することが示された。

共感性が発達障害者への態度に及ぼす影響 —発達障害者との接触経験がある大学生を対象として—

塚口智楓

本研究は、発達障害者との接触経験がある大学生を対象に、共感性と接触の質が発達障害者への態度に及ぼす影響について検討を行った。参加者（184名）は、発達障害者との接触経験の有無及び接触内容、青年期用多次元的共感性尺度、交友関係尺度、当惑尺度を含むオンライン調査に回答した。結果から、発達障害者に対する態度の違いを生み出す要因として、共感的関心や個人的苦痛の高さ、発達障害者との関わりが関与していることが示された。また、発達障害者との接触の質の違いを生み出す要因として、共感性は関与しないことが示された。以上より、共感的関心が高いと発達障害者との具体的場面での交流に対しより肯定的感情を抱く一方で、個人的苦痛が高いと彼らへの差別意識を強めることが示唆された。また、発達障害者との関わりがあるほど彼らに対し肯定的認識をもつこと、共感性ではない様々な要因が接触の質に影響を与えることが示唆された。

大学生のレジリエンス要因に関するモデルの検討
—内的作業モデルとソーシャル・サポートの観点から—

古 井 遥

現代においてストレスを避けて通ることは出来ず、ストレスからの回復力を高めることが求められている。特に近年大学生の不適応が問題になっているため、大学生のレジリエンスを高める要因の包括的なモデルについて、内的作業モデル (IWM) およびソーシャル・サポートの観点から検討を行った。大学生111名(男性25名, 女性84名, その他3名)を対象に自己評定式の質問紙調査を行い、共分散構造分析や相関検定による解析を行った。その結果、親密性回避がソーシャル・サポートを媒介してレジリエンスに影響を与えるモデルが概ね支持された。一方で、見捨てられ不安では支持されず、IWMによって異なる影響関係にあることが示唆された。また、見捨てられ不安からソーシャル・サポートへのパスが負の値を示し、見捨てられ不安と獲得的レジリエンスの自己理解に正の相関関係が認められた。各変数間の関係性に認知や態度など内的な要因が関与している可能性が示唆された。